戦後思想再考——ポスト６８をめぐって

世話人：　三島憲一

報告者：　初見基

討論：　中野敏男、川本隆史

　冒頭報告をした初見会員は、「１９６８年」の評価に関して日本と西ドイツ・統一ドイツ（以後ドイツとする）に共通する問題および異なる影響を中心に挙げ、後半において、その後の保守化の問題を、吉本隆明の「自立」を媒介にしながら論じた。また、記憶のあり方について、集合的記憶と社会的記憶をめぐる考察を各所で随伴させた。以下簡単に発表要旨をまとめる。

　学生運動に対するハーバーマスの厳しい内在的批判は基本的に日独両方にあてはまる。

　「左翼ファシズム」を危惧したハーバーマスが、学生運動に見ていた重要な役割は、政治化されずに隠蔽されている事柄を意識化させるという啓蒙的批判である。それに対して学生たちの間違いは、「革命的状況」でもないのに、また世界各地での紛争に感情移入をしたところで、政治的に無意味であるのに、象徴行為と現実の混同にあるという議論であった。

 　だが、ハーバーマスの見解には、「1968年」の非現実的な相、いわばユートピア的地平（「暴力の楽しさ」、破壊願望）に対する感受性が欠けている。「1968年」を語るうえで、暴力の発現につながる祝祭的な要因を軽視することもできないからである。現代社会において武力革命の可能性はないにしても、「暴力」をどのように位置づけてゆくべきか、ハーバーマスなら、「芸術」の美的体験にその機能を見ようとするだろうが、それでは済まないのではないか、という疑念が拭えない。

　とはいえ、ハーバーマスの批判は、当時の日本における学生叛乱にもあてはまる。政治的効果としてはいたずらに犠牲を生みながらほとんど何も獲得できないという結果になったのは、否定しようがない。

　こうした共通性にも拘わらず、ドイツにとっての「1968年」は、戦後を画する年号として広く認められている。少なくともドイツではあとから見て「民主主義への覚醒」を促した役割はたしかである。その際「知識人と大衆」という問題設定こそは、日本の68年で出された問題とドイツのそれとのあいだのずれをよく示している。というのは、「自由に浮遊する知識人」と「大衆」との乖離こそが、日本においては、1930年代以降の大きな問題点であり、とくに「転向」をめぐる議論においても俎上に載せられていたからだ。

　そのなかで、当時流通した「自己否定」という観念は吉本隆明が唱えた「自立」と裏腹である。吉本自身は、戦中の経験と60年安保に到る戦後の1950年代の政治状況を踏まえて、全体より個を重視し、知的上昇に対する生活者の思想として「自立」を唱えた。その裏には戦後民主主義批判があった。軍国主義ばかりでなく、社会主義運動においても往々にして個人は全体の犠牲とさせられてきた、そして前衛党が大衆を指導するという図式が自明なものとしてあった、こうした点へのアンチテーゼとしても吉本の「自立」の主張を理解できる。

　「自己否定」の思想はこの「自立」と、既存左翼の特権性への批判や、知による社会的上昇の拒否という点で多くを共有している。とりわけ東京大学のような「エリート大学」において既存左翼への否定意識、社会のなかでの上昇してゆくことのやましさが「自己否定」の唱導へとつながっていた。吉本が「生活者の思想」として提示したのに対して、ここでは大衆から離反する自己を否定することで「知識人と大衆」というアポリアから抜けだそうとしている。

　だが、この「自己否定」なるものは、その後なしくずし的に否定され、自己保身とシニカルな快楽主義へと変貌する。祭りが終われば、「自己否定」では生きてゆけず、ありていに言ってしまえば「自己否定」の否定としての「自己保身」がまかり通る。その過程で自立思想が媒介的役割を果たしたのかもしれない。

　つまり全体より個を優先する、これを突き詰めれば、個人的快楽の追求こそ誠実な態度ということになり、規範的な姿勢など問題とならなくなる。その行き着く先が、バブル経済のなかで踊った快楽主義だった。たとえそこまでいかなくとも、「生活思想の深化」は生活保守と紙一重で、全共闘時代を自慢げに昔話として語る面々の多くが、必ずしも180度の「転向」意識を抱くことなく、比較的スムースに生活保守に陥っている。吉本の言う「昼寝の思想」が便利に使われもした。

　「生活思想の深化」が規範意識をいかに再獲得するのか、重大な問題がそこで提示されている。

　だが、「自己否定」の結果はこれにとどまらない別の側面も持っていた。「自己否定」はまずもって特権的な自らを対象化したものだったが、それが推し進められることで、自らの属している場所にも向けられる。「自己否定」の徹底化としての観念的「底辺」「辺境」の発見に結びつく。

　つまり、日本国家の侵略・植民地主義の過去・歴史、そしてそれが清算されていない事実への否定的意識が強まってきたことであり、戦後の経済復興の裏にある欺瞞性、新たなるアジア侵略のうえに成り立つ日本の「繁栄」への否定的意識の先鋭化であり、国内的には「差別」という観点の導入、被差別者の「発見」であった。それはまた、戦後民主主義批判ともなった。

 ドイツにおける「1968年」が、ナチ時代の過去について押し黙ったまま戦後復興を遂げてきた父親の世代に対して「お父さん、あなたはあのとき何をしたのか？」という問いで欺瞞をつくものであったように、当初から過去の問題が重要な論点だった。それに対して日本においてこれが視野に入ってくるのは、いささか遅れて、それも異なった道筋を通ってだった。「自己否定」という回路から入ることによって、対外的には中国、朝鮮など、アジアに対する贖罪意識、「血債の思想」というかたちで現れる。

　また国内的には、「差別」という観点が導入されて、すでに当事者からの声が挙げられていた在日朝鮮人、被差別部落にとどまらず、沖縄、アイヌ、そして寄場労働者、女性、障害者というように、それぞれ質の異なる社会の歪みによる被差別者・被抑圧者が「発見」されてゆく。

　アジアに対する視線にしても、また被差別者に対する視線にしても、それまで問題化されていなかった点が可視化されて、他者の傷みへの想像力が日本の政治文化のなかで根づいていった意味はおおきい。

　ただここでは、その否定面を指摘しておきたい。

　第一に、「差別／被差別」という二項対立図式を徹底させてゆくことで、さまざまな負の属性を有する者に「革命」の根拠を求め、「被差別者」が観念的な拵え者とされ、「日帝本国人」はそれだけで罪を負った者という単純化が行われてゆく。これが70年代初頭の爆弾テロを支える論理だった。

　そして第二に、「差別」が、「内なる差別」といった言い回しに表されるように、個人の内面の問題として倫理化されてゆく。差別者としての自分から脱却するためには、自らの血で贖うしかないという発想から、運動への献身、自己犠牲が要求される。いずれにせよ、きわめて不寛容でリゴリスティックな倫理主義の装いをもって70年代以降の社会運動にしばしば現れた。

　現在にあっても、社会運動のなかにこの論理が持ち込まれると、現行制度内でも充分に解決可能な問題に対しても、差別者としての自分をどう脱却するのか、といった脅迫や、さらに天皇制を打倒することなく根本的解決はできない、といったかたちで混乱が生ずる。

　以上の初見報告に対して、中野会員からはつぎのようなコメントがあった。

　まず、１９６８年という時点の意味については、このセッションが主題としている「戦後思想」という見通しの中で、戦争の時代とその責任を問う５０年代と９０年代に挟まれた７０年代という観点からも考えてみる必要があろう。つまり、朝鮮戦争という状況を背景に「再び戦争に巻き込まれるな」と叫んだ５０年代の被害者的な立場からの反戦意識から、９０年代にようやく明示的な思想課題となった植民地支配責任の認識に到る過渡として、６０年代から７０年代へ向かうこの時期にベトナム戦争を背景に戦争への加担という問題が自覚され始めたことは、それの担い手たちの連続を含めて意義を理解する必要がある。７０年代の「底辺」、「辺境」についての課題意識は、一括して「観念的」と評されるが、生き方の転換を求めてそれを実践した人々の存在があったことも忘れるべきではない。

　もっとも、それを含めて「倫理主義」と論難されてしまうことは、その後に続く「左翼」内での暴力と、「左翼言説」の自己崩壊を見れば、理解できないことではない。しかし、行動への駆動力として「倫理」の意味を考えるならば、そこで運動が「倫理」を問うたから閉塞したと見るのは短見であり、むしろそれを超える力のある新たな倫理が生み出されなかった問題として、この時の思想課題を考えてみる必要があるのではないか。

　それを考えるとき、日本の「６８年」を象徴するとされる「自己否定」の言説が、なし崩し的に否定されて自己保身、バブル快楽主義に向かうプロセスで、吉本隆明的な自立思想がそれを媒介する役割を果たしたという論点は、問題提起として興味深い。

　さらに川本会員から、初見報告が「集合的（記憶）」に対置しようとした「社会的（記憶）」の含意と、初見がおそらく挑発的に示唆した「暴力それ自体の楽しさ」の真意についての質問があった。

　「68年から何を引き継げるか」という司会者の設問に対して川本は、「反権威主義」（のみ）と答えた。その際、当人が念頭に置いていたのは、松田道雄（1908～1998）のコラムの一節である――「私のニヒリズムといってもそんなに高遠な思想ではない。とにかく、いばる人はきらいなのだ。いばる人というのは、なにかによりどころをもっていていばるのだが、そういうよりどころをみんながみとめないことにすれば、いばれなくなるはずだ。伝統だとか、社会的地位だとか、過去の功績だとか、富裕であることとか、そういうものを、たいしたものでないと思えばいい。むずかしくいうと一切の権威をみとめないことだ。」（「私のニヒリズム」、『毎日新聞』1973年3月20日）

　質問として、「高度成長」および「資本主義」の変貌こそが68年のラディカリズムを逼塞させたのではないかという問いがあった。「経済」と「思想」の絡み合いをめぐる、古くて新しいこの探究課題に取り組むにあたっては、「安楽への全体主義」と格闘した晩年の藤田省三（1927～2003）の問題でもあると、川本から返答があった。